

國學院大學學術情報リポジトリ

神道研究の国際的ネットワーク形成：
神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成：
21世紀COEプログラム

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 國學院大學21世紀COEプログラム「神道と日本文化の国学的研究発信の拠点形成」 公開日: 2024-06-25 キーワード (Ja): 170.4, 神道 シントウ キーワード (En): 作成者: 井上, 順孝, 魯, 成煥, 色, 音, テーウエン, マーク, ブリーン, ジョン, ベンテリー, ジョン, ナカイ, ケイト, ヘイヴンズ, ノルマン, 遠藤, 潤, 平藤, 喜久子, 武井, 順介, シッケタンツ, エリック, 加藤, 里美, 加瀬, 直弥, 松本, 久史, 真田, 治子, 稲場, 圭信, 國學院大學21世紀COEプログラム メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000506

セッション4

知的ネットワークの意義と機能

ジョン・グリーン

イギリス ロンドン大学東洋・アフリカ学院教授



【司会（ハイヴンズ）】 第4セッションに入ります。今回は、ジョン・グリーン先生に「知的ネットワークの意義と機能」というタイトルでお話いただきます。

ジョン・グリーン先生は、ケンブリッジ大学の学士号、修士号、博士号をそれぞれ取得され、現在はロンドン大学のSOAS（The School of Oriental and African Studies）の教授でいらっしゃいます。SOASでは、The Japan Research Centre（日本研究センター）の所長も務めています。著作は多数ありますが、最近の日本語での出版としては、「靖国——歴史記憶の形成と喪失」（『世界』2006年9月号）があります。また、「孝明政権」の確立と展開が『中央史学』29号（2006年3月）に掲載されています。

では、グリーンさん、お願いします。

発題

ジョン・グリーン

【グリーン】 ご紹介をいただきましたジョン・グリーンと申します。このたび、第5回国際シンポジウム、「神道研究の国際的ネットワークの形成」にお招きいただき、ありがとうございました。身に余る光栄に思います。井上順孝先生を始め実行委員会の方達に心からお礼を申し上げます。

さっそく本題に入りますが、神道研究の国際的ネットワークを形成しようという提起は、基本的には時を得た提案だと私は評価します。こういったネットワークづくりは、国学院大学のCOEの今までの活躍のおかげで、すでに軌道に乗りつつあることは明かです。今日、われわれ、韓国人、中国人、イギリス人、オランダ人、アメリカ人、そして日本人が国学院大学COE主催のこのイベントに集まり、神道について語りあっていること自体が、その何よりの証左となりましょう。

ただ、ネットワークは、これのみで十分なのかどうか。これをさらに発達させる方法はないのか。これらの点を検討する余地は十分にあるかと思います。そこで、今日は3節を立てて、次のように論じていきたいと思っています。

まず、国学院大学COEの今までのあり方、その業績を振り返って、国学院大学COEの、ネットワークの中軸としての可能性について、あえて考察をします。このすでにできつつあるネットワークを発達させ、さらに充実したものにするのにはどうすればよいのかについて考えた時に、浮かび上がってくるのが、国学院が外部組織や他大学とどのように協力するかという問題でしょう。第2節では、この点について提案をします。

知的ネットワークは、さまざまな形態が可能なのは言うまでもありません。国学院大学COEの今までのあり方もあれば、それをさらに発達させたところの組織間の協力に基づいたあり方もありましょう。さらに例えばネットワークのオンライン版も可能で、現に欧米では、そういった事例がいくつかあります。第3節では、神道研究のオンライン版の

可能性について検討を試みます。

ところで、私が選んだタイトルの「知的ネットワークの意義と機能」は、いかにも偉そうで、お集まりいただいた皆さんに、私が専門的知識を持っているという印象を与えるかもしれません。実は、私は、そういった専門的な知識は持っていません。今日のお話は、むしろ素人の話で、上述のそれぞれの可能性について2、3気づいたことを指摘するにとどまります。

さて、国学院大学COEが目指すところのネットワークは国際的なものですが、私は正直に言って、その目指すところの国際性に若干ながら違和感を禁じえません。私のような海外研究者をも許容できるネットワークはきわめて魅力的ですが、海外研究者のためのネットワーク、あるいは海外研究者にあわせたネットワークはあまり魅力がありません。ましてや日本語の文献が読めない、日本語が書けない海外研究者を対象にしたネットワークはそうです。私個人が切望するのは、草分け的な神道研究をやっている日本人と接触し、議論ができる場です。また、神道の実践者たる神職、神道の本部たる神社本庁の職員などとも接触して、議論ができる場です。これはないものねだりと言われたらそれまでですが、その可能性を提供してくれるネットワークを私は希望します。

しかしながら、問題は、私個人が一番交流の機会を持ちたい方たちは、必ずしも国際的志向を有しないかもしれない、国際的ネットワークに関心を持ってくれることもまた期待できないかもしれないという点です。ネットワークの国際性をどう位置づけるかによって、ネットワークの中軸に座ってほしい彼らが、逆に遠のいていく可能性も高いとも言えましょう。それもまた至極当然でしょう。

神道研究ネットワークの国際性をどう取り扱うべきか、どう位置づけるべきかという問題は、もちろん国学院大学COEもその設立以来直面してきたことだと思われませんが、素人である私には、いまだにそれが完全に解決できたとも思えません。今年初めて、COEのイベントに参加させていただいた私ですが、COEの神道研究活動は、どうも国内向けのそれと海外向けのそれとに区分けされたところもあるようです。意図してそうなったわけではないにしても、結果的に、そうってしまったところがあります。

たとえば、今年5回目を迎えた国際シンポジウムのシリーズは、これまで「各国における神道研究の現状」「神道はどう翻訳されているか」「神道の連続と非連続」「オンライン時代の神道研究と教育」、さらに今回の「神道研究の国際的ネットワークの形成」というように続いてきました。それぞれのテーマは、海外の研究者にとって重要かつおもしろいものですし、また発題者の発表も刺激的なのがたくさんあったことは確かです。国学院大学のCOEのうち、この流れは海外の研究者に完全に門戸を開いています、気づくことがあるとすれば、それは、これらの国際シンポジウムでは基本的に日本人を発題者として迎えていないという点です。実行委員会は、COEの年季の入ったスタッフで、コメンテーターも国学院大学の先駆的な仕事をやっている教員ですが、発題者は海外の研究者のみとなっています。門戸を開き過ぎているということも考えられましょうか。COEは他方で、たとえば、「国学」、「近世の祭祀と儀礼」などの研究会を設け、それぞれ「国学的方法」「近

世日光の祭祀と儀礼」「近世・近代の神道における持続と変容」などのイベントを開催しています。これらの場合は、外国人が発題者、もしくはコメンテーターとして姿をあらわしません。もっぱら日本人の研究者のみの集いとなっています。

実は、われらがここで国際的ネットワークの形成という重要な課題を議論している、ちょうど今、「国家と祭祀の歴史的展開」の日本人研究者中心の研究会が、同じ国学院大学の別のところ（1105 教室）で開催されています。

これらのことは何を物語っているのでしょうか。それは1つには、やはり国内の神道研究者にわれわれ海外研究者の業績に関心を持つように仕向けることがなかなか困難だということではないでしょうか。

蛇足ながら、私は『神社新報』という新聞をとっています。ついこの前読んでいた号は、「国家と祭祀の歴史的展開」という研究会の告知を掲載していましたが、このシンポジウム「神道研究の国際的ネットワークの形成」の告知は掲載していませんでした。これは要するに同じようなことを物語っているのではないかと思います。

結論的にいうならば、私のような海外研究者に門戸を完全に開いた流れと、必ずしもそうではない流れとがあるように見えます。その裏には、海外研究者の業績が十分知られていない、十分にまだ認められていないということもありましょう。この基本的な問題は、どう解決すればよいのかがよくわかりませんが、海外研究者にもCOE全体の研究会などの活動をもっと宣伝し、海外の発題者を積極的に募集して、門戸を開いていただきたいというのが私の希望です。

また、私たちにも、自分なりの研究業績を広める、宣伝する義務が当然あると思います。後者のような義務を果たすのには、海外研究者の神道論文集でも出せばどうかと私は前から考えていますし、実はテーウェン氏と手を組んで論文を集めて、日本語訳ができる人を見つけ、その編集にいったん着手しましたが、いつものてんでこ舞いで、その企画は流産となってしまいました。

いずれにしても、国学院大学COEを中軸にした神道研究の国際的ネットワークをさらに発達させ、海外研究者に門戸を開くという企画は、私は素晴らしいと思います。しかし、神道の国際研究と国内研究とがずっと並行線をたどっていくのではなく、その2つの流れを何らかの形で総合していかないことには、さらなる発達は十分に期待できないかもしれません。

第2節に移ります。私が設立当初から理事を務めてきた神道国際学会も、上述の神道研究の現状に見える二元性に当然直面してきました。それに打ち勝つことこそ、当初からの最大の課題でもあったと言えます。

神道国際学会のこれまで不可分にあった学術研究と啓蒙活動とを完全に引き離すよう、私とテーウェン氏が先頭に立って同理事会に働きかけました。その結果生まれたのが、今の学術を追求する神道国際学会と啓蒙活動に夢中のISF（International Shinto Foundation）です。私たちは、もっぱら前者の神道国際学会にかかわっていますが、生まれ変わった同学会が、前述の二元性問題をどう取り扱ってきたかについてごく簡単に触れ

てみたいと思います。

まず、2年前ですか、「道教と日本文化」をテーマにしたシンポジウムが挙げられます。これが有意義だったのは、まず神道を極めて広く解釈したことであり、ついで、先駆的な研究をやっている中国人、日本人、欧米人を同じ舞台に立たせ、講演をさせたこと、そして、日本以外で開催したことです。すなわち、第1回目は秩父でやりましたが、第2回目は、中国の浙江大学でやりました。そして、その原稿やコメントをまとめて、講演録ではなく、きちんとした研究書として『道教と日本文化』（神道国際学会、2005年）という本を出しました。神道国際学会の事務局の人たちには怒られるかもしれませんが、これは神道国際学会が出した出版物の中で初めて学問的な価値がある本だと、私はそういうふうに評価しています。

次の事例ですが、去年の暮れに開かれた、——これもテーウエン氏が若干触れましたので、ここではごく簡単にしか触れませんが——「神道国際学会理事 専攻研究論文発表会」です。この集いの特徴は、まず発題者が事務局からテーマを押しつけられたのではなく、みずからの研究について語ることができたことです。そして、このイベントの国際性に関しては、海外研究者も日本人研究者もどちらも発題、コメントの任務を果たしたことがあげられます。さらに、たとえば、私が靖国の記憶の問題を取り上げ、私と政治的立場がまるで違う皇學館大学の新田均さんがコメントを寄せてくださり、かなり刺激的な、火花が散った討論となったように、思想や立場をこえた議論が行われたという点で実に有意義なイベントだったと私は評価します。そして、このイベントを踏まえて、神道国際学会で発表された原稿をまとめて、学術雑誌でも出そうかという企画が今あるわけです。

欧米、アジア、つまり世界中の神道研究者を集め、神道を語り合うことを目指す神道国際学会は依然として問題も限界も確かに抱えていますが、いい仕事もやっています。私は、それがよりいい方向に進んでいくよう、これからも努力を続けていきたいと思っていますが、そこでささやかなお願いがあります。

神道研究のメッカたる国学院大学COEは、これからネットワーク形成、ネットワーク発達を模索していきますが、将来も機会があれば、何らかの形で神道国際学会のメンバーと手を組んで、神道研究の昂揚を図っていただきたい、そのように私は願っています。

さて、知的ネットワークは1つの中軸を立てて初めて機能するわけですが、神道研究のネットワークは、国学院が中軸になるのも当然過ぎるぐらい当然です。しかし、中軸の地理的周辺をなす海外にパートナーをいくつか据えるということも検討すべきかもしれません。私が所属するロンドン大学SOAS校をそういったパートナーの候補として考慮に入れていただきたいと思います。SOASは、広い意味での神道研究の分野で活躍している研究者が3人もいます。その顔ぶれには、近現代をやっている私のほかに、ブライアン・ボッキング教授（Brian Bocking）とルチア・ドルチェ助教授（Lucia Dolce）がいます。もともと中国唐時代の仏教が専門のボッキング氏は10年ほど前から神道に関心を持ち出して、*A Popular Dictionary of Shinto*を出し、その後、中世、近世、近代にわたる三社託宣についての注目すべき研究も発表しました。ドルチェ氏は中世仏教、とりわけ中世

の日蓮宗が専門ですが、彼女は、日蓮における神崇拜の伝統を研究の対象にしています。その業績は日本でも注目を浴びており、去年、第12回中村元賞を受賞しました。

我々3人は、ルチア・ドルチェを中心に、SOASの日本宗教研究センターの運営委員会のメンバーです。活動としては、学期ごとに、今、画面に出しましたが、こういったニューズレターを発行しています。それから、週1回の大学院生、研究者の研究発表会を設け、1年に1回は国際シンポジウムも開催しています。近年のものとしては、建国神話に関するものと日本における星信仰の国際的学会とをやってまいりました。

ここで訴えたいのは、国学院大学がこれから、よいパートナーを物色するようなことがあれば、ロンドン大学のSOAS校こそ、そのよいパートナーになる素質があるということです。スタッフ、大学院生の交換、持ち回りで開催するワークショップなど、協力の可能性はいくらでもあろうかと思えます。

同僚のドルチェが、立命館大学COEで先週行われた国際シンポジウム「儀礼の力——学際的視座から見た中世宗教の実践世界」の実行委員を務めていましたが、このシンポジウムは、要するに立命館COEとロンドン大学SOAS校の共催で開かれたわけです。こういった形態の組織間の協力は国際的な神道研究のネットワークを形成していく上で、1つのヒントにでもなると私は確信しています。

さて、最後に第3節の課題になるネットワークのオンライン版について、ごく簡単に言及させていただきます。神道研究のオンラインネットワークの必要性を私が痛感しましたのは、ごく最近のことです。いきさつはつぎの通りです。

『神社新報』の「こもれば」欄に、2、3カ月に1回ぐらい記事を寄稿するよう依頼されています。最初原稿は靖国について書きましたが、それは結論から言って邪道でした。

『神社新報』の編集室は、「ややもすれば、神社本庁に対する批判、ひいては神社界の意志の共有を損なうものとしてとられかねない」との理由で拙稿を見送ってしまいました。『神社新報』は読者の感情をさかなでするわけにはいきませんが、そのとき、神道関係のオンラインネットワークでもあれば、拙稿をそこのメンバーに公表して、せいぜい意見の交換ぐらいはできたのにと、そういうふうに思いました。

悔しい思いいっぱい、インターネットで検索して見つけたのが、「神社オンラインネットワーク連盟」です。その事務局の方が、ちょうど9月9日に、この国学院大学COEの研究会で発表されたいのですが、とにかく私はすぐにメンバーになって、そのメーリングリストに拙稿を送ってしまいました。

神職が約800人ぐらい参加していると言われる「神社オンラインネットワーク連盟」は、なかなかいい発見でした。神職がどのような問題にいかなる姿勢をもって接近しているかが垣間見えるという意味で、いい勉強になっています。「時局問題」の欄に掲載されたテーマから判断すれば、今は「清め塩」「夫婦別姓」「靖国神社訴訟」「外国人参政権」「神の国発言」が中心的課題のようです。私がメーリングリストのメンバーになってからでも、お墓参りについて、また大祓詞についても意見ないし情報が交換されていて、私が学習したことが多いです。

ただ、ひとつだけ遺憾に思うのは、神社関係者専用のリストが別にあって、私のような部外者が、それに参加できないということです。このオンラインネットワークは重宝なものです、研究者を対象にしたものではないので、限界があります。

私は、近世の陰陽道から近代国家の神話、昭和を生きた葦津珍彦のことから、葦津がその設立にたずさわった神社本庁へと研究の関心事の幅はきわめて広いのですが、それぞれのテーマについて史料を検索し、問題を提起して、議論できる場が欲しいと思っています。私のような欲張りな研究者のニーズに応えるようなオンラインネットワークはどうい実現できそうにないと思われるかもしれませんが、実は欧米には、そのモデルになるものはいくつかあります。日本には、しかし、研究用のそうしたものが皆無でないにしても極めて少ないです。

私が調べたところでは、日本の事情はこうです。若い日本の研究者が個人的にメーリングリストをつくり、一定期間に限定された研究集会やパネル準備のために、少人数での情報交換はあるようですが、欧米にあるような大がかりな学会に相当するような情報交換が可能になるネットワークはありません。せいぜいのところ、各学会のホームページに、就職情報や出版情報を載せる程度ようです。メールは、学会の月例会の案内が来たり、自分が研究会をするとき、人を集めたいとき、知人の研究会のメーリングリストに載せてもらうというのがせいぜいようです。歴史学研究会は、例えば近代史部会の月例会の案内は送信しますが、それは意見交換の場ではありません。日本宗教学会も、そういった大がかりなネットワークはできていないようです。

そういった意味では、欧米におけるアジア宗教研究者、日本史研究者、日本の政治学研究者は特に恵まれています。この報告の冒頭で、私は、自分のことを素人だと言いましたが、まさにこれからの話では、自分が素人だということがばれてしまうような気もしますが、オンラインネットワークで特に評判がいいところを2、3、ごく簡単にご紹介したいと思います。

まずご紹介するのが、H-Buddhism (<http://www.h-net.org/~buddhism/>) といって、これが、そのホームページです(図2)。ミシガン州立大学が管理しています。この特徴とするところはディスカッションのページです。ここでは、あまりはっきり見えませんが、だいたいこのことはわかっていただけるかと思います。例えば最近、近代以前の神道はまさに仏教とみなしたほうが良いという見方があって、このH-Buddhismには、中世の神道についての議論があつたりします。このH-Buddhismは就職情報なり、出版情報なり、書評もまた掲載します。1つの特徴としては、チャールズ・ミュラー(Charles Muller)という有名な日本仏教研究者が中心に形成された編集委員会があって、委員会が監視というか、管理をして、議論のレベルが常に高いものを、委員会のほうで保証するような役割をしているということがあります。

次にPMJS (<http://www.meijigakuin.ac.jp/~pmjs/>) ですが、PMJSは、何の省略かといえば、Pre Modern Japan Studiesで、要するに「前近代日本研究ネットワーク」の省略なのです(図3)。これは明治学院大学がそのネットワークの拠点となりますが、



[about](#) [search](#) [sitemap](#) [editors](#) [donate](#) [contact](#) [help](#)

[Discussion Networks](#) [Reviews](#) [Job Guide](#) [Announcements](#)

General Information

- [About](#)
- [Subscribe](#)
- [Manage Subscription](#)
- [Subscription Help](#)
- [Welcome Message](#)
- [Posting Guidelines](#)
- [Editors](#)

Resources

- [Discussion Logs](#)
- [Buddhist Book Reviews](#)
- [Buddhist Studies Links](#)
- [Graduate Studies Programs](#)
- [Job Opportunities](#)

Search H-Buddhism

Enter keyword(s)
[Search all H-Net Logs](#)



H-Buddhism

an H-Net discussion list

The Buddhist Scholars Information Network (H-Buddhism) serves as a medium for the exchange of information regarding academic resources, new research projects, scholarly publications, university job listings, and so forth, for specialists in Buddhist Studies who are currently affiliated with academic institutions. It is not a list intended for general discussions of issues regarding Buddhism as a religion, philosophy, practice, or lifestyle (there is a wide variety of lists on the Internet that already serve this purpose), nor a list where non-specialists may pose queries. People who are not specialists in Buddhist Studies can access messages from H-Buddhism through this web site, but they can neither subscribe nor post their own messages.

Recent Messages

- [CALL FOR PAPERS: AAR Buddhism in the West Consultation 2007 \(Wilson\)](#)
wilsonk@emil.unc.edu
- [CALL FOR SUBMISSIONS: Law, Religion, and Culture Group \(AAR\), Dan Arnold](#)
darnold@MIDWAY.UCHICAGO.EDU
- [CONFERENCE: Scholarship and Performance Buddhist Worlds, Dan Arnold](#)
darnold@MIDWAY.UCHICAGO.EDU
- [Re: PETITION: IFEX: Researcher Support for Open Access to Research](#)
(Drummond) "michael drummond" <mdrummond@gmail.com>
- [OFFYedic Workshop \(Freiburger\), Oliver Freiburger](#) <of@uts.cc.utexas.edu>
- [JOBS: H-Net Job Guide - January 12, 2007 to January 20, 2007, "Jobsite"](#)
q@guide@emil.h-net.msu.edu
- [PANEL PROPOSAL: Greater Interest for an IABS Panel on Monuments \(Warner\)](#)

Recent Reviews

- [Reviewer: Gerson Kopf](#)
[Author: James Heist](#)
[Title: Ethnographies of Nothingness: An Essay on the Kyoto School](#)
- [Reviewer: Steven Heine](#)
[Author: Jin Y. Park, ed](#)
[Title: Buddhism and Deconstructions](#)
- [Reviewer: Monika Dieb](#)
[Author: Harumi Kurihara](#)
[Title: Envisioning Pictures: Buddhist Processions and Etc.](#)

図2 H-Buddhismのホームページ

pmjs is an interdisciplinary forum for more than 730 members worldwide who do research into earlier periods of Japanese art, culture, history, religion and literature. Founded in Sept. 1999 as the "premodern Japanese studies mailing list," it is now known by its acronym. The *lingua franca* of the list is English. You can subscribe to get mail as it is sent out or by daily or weekly digests. A Japanese digest is now also available. Members can access password-protected "logs" to read past messages sent to the list. The [index](#) to these logs requires no password, and gives a good idea of the range of our discussions. More than fifty "threads" (discussions) can be read in the public archive. A major project of these pages is a bibliography of premodern Japanese texts and translations.

News:

- (2006.09) Bernhard Scheid and Mark Teeuwen, eds. *The Culture of Secrecy in Japanese Religion*. London and New York: Routledge, 2006. 416 pp. [\[details\]](#)
- (2006.08) [premodern texts & translations](#) database revised. New page added for [kyogen](#)
- (2006.07) [KANBUN](#) discussion edited as public archive--the first for some time.
- (2006.01) [Logs](#) now up to date. Recent pmjs pages now adopt Unicode.
- (2005.08) [PMJS papers](#). "Reading the New Ballads: Late Heian kanshi poets and Bo Juyi" by Ivo Smits; "The Rise of the Modern Japanese Novel: Towards a neo-Darwinian approach to literary history" by Michael Scanlon; "The Possession of Ukifune" by Royall and Susan Tyler.

Sign up online to the pmjs mailing list: [new subscriptions](#) | [changes](#)

Japanese pages: [日本語トップ・ダイジェスト](#) [購読](#)・[ログ](#) [目次](#)

Page last revised: 2006.10.02

main sections of site:

[archive](#) | [books](#) | [logs](#) | [members](#) | [nh](#) | [papers](#) | [resources](#) | [texts & translations](#)

on this page: [search forms](#) - on this site - [reminders for members](#) - [contact editor](#) - [Amazon links](#)

Search forms for [pmjs](#) and [Monumenta Nipponica](#): Searches are case-insensitive. Enter romanized terms as you would expect to find them on either site, without diacritics. Avoid common words like *the* and *of*. Enclose phrases in quotation marks ("Genji monogatari") unless you want the combined results for BOTH words. More [options](#) | [search tips](#)

図3 PMJSのホームページ

内容的におもしろいところは、H-Buddhismと同じく、議論のレベルが極めて高いという点です。例えば、この画面でもごらんいただけるように、論文まで掲載されています。さらにこのPMJSは、欧米、日本の大学を使って、研修会も開いています。ですから、H-Buddhismよりも一歩進んだ形といえますか、そういうネットワークとなっています。それから、このPMJSですが、いろいろな教材に使える資料まで、ほとんど英文ですが、載せています。PMJSは日本の前近代の研究をやっている欧米の研究者なら、大学院生もほぼ全員と言っていいぐらい、このネットワークのメンバーになっています。

H-Buddhism やPMJSには、どちらも1つの大きな欠点があります。それはもっぱら英語によるネットワークだということです。海外の研究者がお互いのための情報交換、議論を戦わせる場となっていることです。それが欠点だと私は理解しています。

Part of Nobumi Iyanaga's website . n-yanag@ppp.bekkoame.ne.jp. 12/16/06.



kudenML list members

1. Andreeva Anna
2. [Bexhi, Clemente](#)
3. [Blanco, Nicola S. B.](#)
4. Bodiford, William
5. Bond, Kevin
6. Boussemart, Antony
7. Bowring, Richard
8. [Cook, Lewis](#)
9. [Doi Hiroshi](#) 土居浩
10. Dolce, Lucia
11. Dreitlein, Thomas
12. [Ernakova, Liudmila](#)
13. Faure, Bernard
14. [Fesyun, Andrey](#)
15. Fremmerman Aptilon, Sarah
16. Fukuohara Toshio 福原敏男
17. [Fuilmald, Kazuhiro](#) 藤巻和宏

To obtain more information, please click on one of the coloured names in the list to the left.

図4 Kuden-ML のホームページ

ただ、次に紹介するのは、——すでに画面が映っていますが——そのような限界を越えたネットワークで、実は日本人と欧米人が手を組んでつくり、運営しているものです。それは kuden-ML です(図4)。kuden-ML は、中世日本の宗教と宗教文化の研究を中心としてつくったものですが、彌永信美さんがその発案者で、ウィーン大学のベルンハルト・シヤイド氏(Bernhard Sheid)と二人して運営しているようですが、彌永氏に言わせると、kuden-ML は、2カ国語のメーリングリストで、日本だけではなく、世界各国の研究者同士が、自分が書きやすい言語で書き込み、情報交換と理解、交流を深めることを目的としています。そのため、ここに参加するには、一応、日本語と英語が読めることが前提となっているとのことです。「実験的な試みで、「互いに学び合う」精神を中心に据えて、メンバーの方々の積極的な参加を得たい」、と。そういう気持ちで kuden-ML をつくったそうです。これもまたおもしろいことですが、ディスカッションや議論のアーカイブというものが残っていて、いつでも参考にできるようになっています。

このネットワークで1つ、物足りないものと言え、技術面で、極めて古いテクノロジーを使っているのも、メンバーになっても、なかなか操作しづらいところがあります。しかも、これは中世日本の宗教が中心の関心事で、近世、近代は視野に入っていないという欠点もあります。

いずれにしても、以上ごく簡単にしか紹介することができなかったオンラインネットワークですが、これらのよいところをばかりを集めて、いい神道研究のオンラインネットワ

ークができるのではないのでしょうか。国学院大学COEを中軸として、その可能性を探る価値は十分にあらうかと思います。

それでは最後に、上述の指摘を簡単にまとめて結論にかえさせていただきます。

まず、一番最初に指摘した二元性の克服、それはどう対応すればよいかということがあります。克服する秘訣は、いろいろあると思われますが、とにかく海外研究者に無理に合わせないで、海外研究者をも許容できるような形のものが望ましいと私は思います。

次に、秘訣のもう1つとして、あるいはヒントのもう1つとしては、情報の宣伝、もっと海外研究者を対象に流していただきたい、と。そして、海外研究者をもっと積極的に参加するよう声をかけていただきたい、と。それから、われわれ海外の研究者としては、自分の研究をもっと積極的に宣伝する義務があると。

次に組織間、大学間の協力の面ですが、もちろんSOASだけがパートナーとしてふさわしいとは思っていませんが、とにかくSOASと国学院大学の協力が1つのあり得る形態として考えていけるのではないらうかと思います。

最後に、オンラインネットワークのことですが、これも極めて大変な作業だと思われますが、こういった神道研究のオンラインネットワークでもできれば、おそらく重宝がられるに違いないと私は思います。

こういったふうに、どうも具体的な案が全くないようなお話で終わってしまって申しわけありませんが、この辺で切り上げて終わりとさせていただきたいと思います。ご清聴、ありがとうございました。

質疑応答

【司会（ヘイヴンズ）】 ありがとうございます。レジュメにある3つの点であるように、これまで国学院大学COEのやってきたことを振り返って、これから何をやってほしいか。組織間の協力、特にSOASとの協力——これも前から聞いていますが——については、ひとつの可能性として検討させていただきたいと私は個人的に思います。そして、オンラインネットワーク。これも『神道事典』の時代から、やろうとしているのですから、これを続けて展開すればいいところだと思います。それでは、フロアからの質問を受けつけたいと思います。

【江島】 日本文化研究所共同研究員の江島と申します。時間ありませんので、1点だけおうかがいさせていただきたいと思います。

一番最後に、オンラインの3つのサイトをご紹介いただきました。こちらのインターネット上の議論というのは玉石混淆で、いかに「玉」というもの、すなわち信頼性のあるものを担保していくかというのが、最も大きな命題の1つだと思うのですが、そういうものに関しては、この3つの先生が取り上げられたサイトにおきましては、信頼性の担保というものは、どのように確保されていると見ていらっしゃるのでしょうか。その1点だけお伺いさせていただきたいと思います。

【グリーン】 それはやはり、まさに年季の入った研究員、研究者でもって委員会をつくって、その委員会でサイトを管理するというではないでしょうか。自由にだれでも寄稿できるような形ではなく、委員会を通して、監視役を通して初めて掲載されると。そういった仕組みになっているのが、ポイントなのではないでしょうか。

【司会（ヘイヴンズ）】 ほかにありませんか。

【真田】 埼玉学園大学の真田と申します。3点目のオンラインネットワークのメーリングリストのことについてちょっとグリーン先生のご意見を伺いたいのですが。

これはもしかしたら、神道に限ったことではないかもしれないのですが、先生は、メーリングリストで、国際的に、つまり worldwide に、瞬時に議論できる場がほしいとおっしゃっていて、メーリングリストはそういう機能も技術的には果たしているの、そういうふうにしてうまく回っているものもあるかもしれません。ただ次のような例もあります。最近、私が経験したことなのですが、数人の先生で集まって、本を書こうというときに、原稿がまだ未完成の段階から、メーリングリスト——クローズドなメーリングリストですが——にアップして、お互いに意見を交換して、1冊の本をつくっていかうとなったと。そういう試みがあるのですね。その中心になる先生がいらして、メーリングリストをつくるということになったのです。ところが実際始めてみると、これはシーンとしているのですね。そこにアップすることがとても勇気が要って、だれかが自由に意見を言い始めると、うまく回るのかもしれないのですが、何か踏み絵を踏まされているようで、あるいは自分の愚かさが露呈されるようで、そこに意見を書いたり、原稿をアップするのに物すご

く勇気が要るのですね。

欧米の方が、例えば英語のメーリングリストで、それがある程度機能しているとかというのは何となくわかるのですが、典型的な日本人の研究者が参加して、欧米の研究者とうまくディスカッションしていくということのキーはどこにあるかというのがあれば、教えていただければお願いいたします。

【グリーン】 どうなんでしょう。よくわかりませんが。お答えにはなりません、いいですか。わかりませんので、お許してください。

ただ、さっきヘイヴンズ先生がおっしゃったことで、ちょっと気になったというわけでもないのですが、オンライン事典で、それは1つのネットワークの可能性をはらんでいるというようなことをおっしゃいましたね。

【司会（ヘイヴンズ）】 それに関連する翻訳者用のボード（掲示板）があったのです。意見交換とかをする。

【グリーン】 なるほど。ただ、大変私の勝手なのですが、私が切望するのは、日本人と接触、日本人と討論できること。特に草分け的なことをやっている日本人との接触が欲しいんですよ。ですから、特に国際的なそういった場を私個人は求めているわけではなくて、そういった日本人が討論しているようなネットワークに私を入れてほしいと。そういう希望があるんです。自分が、その時々の研究テーマについて問題を提起するなりして、もっと日本の研究者と対話できる場を私に提供していただきたい、とそういうふうに考えています。

【ナカイ】 さっきの2つのサイトについて質問すると、グリーン先生のお考えと私は少し違う観点で、例えば私は H-Buddhism は知りませんが、PMJS と kuden-ML は両方、私も一応、拝読しています。そして、おそらくキーは、両方とも、委員会があっても、一人が管理をしています。そして、例えば kuden-ML のほうですが、彌永さんが、いつも種をまいています。彌永さんがやっていなくなったら、そのサイトは成り立っていないと思います。そしてもう1つ、すごく日本人が活発に討論していて、私もいただいています、ほとんど仏教関係ですので、最近、あまり読まない。まあ、保存はしているのですが。将来、何か読もうと思って保存していますが。ですから、それも1つのおもしろいことで、理想としては2つの言語で、自分が自然に使える言語で発表するというのはグリーン先生と全く同じで、それは理想的な形だと思うのですが、kuden-ML はほとんど日本語になってしまったのです。外国人も時々質問かなんかを出したりしているのですが、最初の考えと違って、ほとんど日本語のものです。もちろん外国人が大いに議論しているところもあります。

ですから、結局、1人のすごい人が管理者でないと、H-Buddhism は違うかもしれませんが、それと、どういうふうに程度を保っていくかということになりますと、やはりクローズということだと思います。入るために自分がどういう人かと。そうすると、つまらないものを出せば断られるということになると思います。

【グリーン】 そうですね。もちろんネットワークは、望ましいあり方は、やはり英語

にすると、われわれの大学も中国人や韓国人の同僚が当然入ってくれなくなってしまうので、やはり日本語一本槍でも十分望ましいやり方かなと私も思っています。

【司会（ハイヴンズ）】 ほかにもう1つぐらいお願いします。では、井上先生。

【井上】 いろいろご要望が出されて参考にしたかったこともありますが、ただ、例えば最後のほうでおっしゃった自分の意見を受け入れるところとか、そういうのは、最近では日本ですとブログとか、mixi (<http://mixi.jp/>) とかというものが流行って、これがある程度、その機能を果たしているのですね。だから、そういうところに入っていけば、ある程度、うまくヒットすると、そういう仲間を見つけることができる。

私は、しかし、アカデミックな場でやるときは、やはりある程度、多くの研究者が満足できるようなシステムをつくらないといけないと思います。ご発表の内容には、グリーンさんの個人的な欲求も強いわけですね。たとえば、実際に神社にいらっしゃる神主さんの具体的な話を聞きたいとか。そういう個人的な希望は個人的なシステムを探して使えばいいのではないかなというのが私の考えなのですね。むしろ学会とか、研究機関とか、こういうプログラムが中心となってやるときには、ここが作り上げたシステムだから、どうぞ。信頼性とか、永続性とか、いろいろなものができますね。むしろ、そういうものが何かということを考えるほうが大事だと思っているのですが、いかがでしょうか。

【グリーン】 おそらくおっしゃるとおりだと思います。私も何度か、ほのめかしましたが、私が切望するようなネットワークは到底ありえないでしょうし。ただ、今の時代ですから、だれでもネットワークが使える、アクセスできるような現在、もっと神道の研究について討論ができる場があっていいのではないかなという気がしています。今のところ、それ以上のことは何とも言えませんが、特に自分がせっかく書いた原稿が見送られてしまった、そういう羽目になってしまった関係で、どうやって公表すればいいのか。そのとき、ネットワークがあればいいなと思っていたので。

【井上】 自分のホームページに書けばいいじゃないですか。

【グリーン】 そうですね。

【司会（ハイヴンズ）】 そうすることで、このセッション4を終わらせていただきたいと思います。 どうも、グリーンさん、ありがとうございました。（拍手）